

建築製図の在り方と評価のポイントー3 =コンペ指導をとおして=

埼玉県立熊谷工業高校 建築科 教諭 竹田 基

1. はじめに 本校建築科で平成 18 年度より課題研究コンペ班の担当になり、大学・専門、協会が主催する設計競技（コンペ）に生徒が挑戦し、コンペの取り組みとしては今年で 4 年目に入る。コンペとはコンペティション（competition）の略で設計競技会すなわち、課題による設計作品の公募を意味する。コンペに取り組む目的は、自分の考え（アイデア）を図面や模型・透視図などで表現し、相手に自分の考えを伝える（プレゼンテーション）訓練をし、建築に関する総合的な力を身につけ、建築の楽しさを生徒に実感させることである。また、コンペは全国から優秀な作品が寄せられ、その中で自分の作品を評価してもらえ（建築専門団体からの評価）貴重な場でもある。

2. 授業での取り組み この教科は、課題研究の中に「建築設計コンペ班」という建築デザインの学習を希望する生徒で編成されている。

コンペ班を選択した生徒たちの理由には、主に「デザインに興味がある」、「設計をやってみたい」など、意欲や目的がある生徒で最終的な進路も大学及び専門学校など建築デザイン方面に行く生徒が多い。

3. 本校の教育課程について 本校の教育課程は右の表 1 になる。コンペに取り組むには基本的な建築知識が必要であり、1 年時では製図（2 単位）さらに、工基（2 表 1. 教育課程表

単位）では 3 班編成の 1 班に模型班を設けている。2 年時では、製図（3 単位）、実習（3 単位）の中に自由設計を設け住宅の設計を行っている。計画では主に住宅を扱っている。そして、3 年次には課題研究コンペ班（毎年 7～9 人）として取り組んでいる。

以上のように、1、2 年生で基本的事項を身に付けコンペへと取り組むが、実際のところスムーズには行かないのが現状である。

4. 研究仮説 現状の生徒の実態は、プランニングとプレゼンテーション力が不足を感じている。そこで、コンペを通じて自分の考え（アイデア）を図面や模型・透視図などで表現し、相手に自分の考えを伝える（プレゼンテーション）訓練をし、建築に関する総合的な力を身につけ、建築の楽しさを生徒に実感させたいと考えた。そのためには発想力をひきたてる教材として、建築に関する雑誌や専門誌、各種メディアから様々な情報を収集することであると考えた。

次に具体的な進行手順方法として、

《 熊谷工業高校 建築科の教育課程表 》

各教科・科目等		3 年			
教科等	科目等	1 年	2 年	専門技術	基礎工学
専門教科に関する各教科・科目	工業技術基礎	●2			
	建築実習		●3	●3	●3
	建築製図	●2	●3	●2	
	情報技術基礎	●2			
	課題研究			●3	●3
	建築構造	●2	●2		●1
	建築構造設計		●2	●2	
	建築計画		●2		
	建築法規				
	選択（計画・施工）				●3

※●履修科目、数字は週あたりの時間を示す。
 ※コンペを行うために必要な基本科目（製図（自由設計も含む）・計画・模型）。

※この教育課程表は平成 20 年度ものである。

進行手順

- ① 敷地条件、主要条件を何度も読ませストーリーを考案し、（利用者からも考える。）個別指導へと入る。
- ② 平面と断面の考案。（条件によっては断面から入る。※傾斜面の場合。）
- ③ 模型製作（必要な場合のみ）
- ④ プレゼン（CD アルバム、旅行雑誌、専門雑誌、大学の卒業設計など用いた説明。）の考案。
- ⑤ 本図面へ入る（フリーハンド）

の5項目で進めることとした。特に、個別指導は何回も行い情報交換し、それを反復することによって生徒の力がついてくると仮説した。そして生徒には完成でなく「めざせ受賞！」という目標を持たせることでモチベーションが上がっていくのではないかと考えた。

5. 年間計画 この仮説を基に年間を通じて進めていくこととする(表2)。各コンペは生徒たちが自由に選択する。条件としては夏季と冬季それぞれ1つずつ計2作品を提出の条件としている。中には、3、4つと挑戦する生徒もいる。

さらに、1月では1、2年生向けのコンペがあり希望する生徒を対象に取り組んでいる。

表2. 年間計画

《 年間計画 》	
月	年間計画
4月	生徒実態把握(3年)。課題の発見。コンペの選択。全体説明。各コンペの選択。
5~6月	過去のコンペの紹介→生徒に事例研究をさせる→プランニング開始 →個別指導へと入る。
7月	道都大学のコンペ提出。提出後、各大学コンペ指導。
8月	個別指導。日工大、愛知産業大、日本大のコンペ提出。
9月	九州産大、日本建築協会、秋田県立大、工学院大コンペの提出。
10~11月	埼玉県・木の家設計コンペ提出 名古屋工大のコンペ同時に進行
12月	名古屋工大コンペ提出
1月	1、2年生向けの中央工学校 軽井沢コンペの指導
2月	1、2年生向けの中央工学校 軽井沢コンペの指導
3月	軽井沢コンペ提出。
※毎年コンペを生徒たちに選択させ、そのコンペの指導をするので年度によっては参加できない場合もある。	

※年間計画は平成19年度の計画を示しています。

6. 具体的な指導内容 ここでは、3年間のコンペ指導の中で平成18年度のコンペを中心にエスキスからプレゼンまでの説明をし、あわせて19・20年度の作品介绍も含めて進めていくこととする。

6. 1. 平成18年度のコンペの取り組み 18年度に取り組み応募したコンペは、以下のとおりである。

- 道都大学美術学部建築学科 高校生住宅設計コンクール2名
- 日本工業大学 全国高等学校建築設計競技 3名
- 日本大学 全国高等学校建築設計競技 2名
- あなたが考える甲斐の家2006 1名
- 名古屋工業大学 1名
- 埼玉県木の家設計コンペ2006 3名

です。ここでは日本工業大学のコンペ、山梨県林業振興課が主催する「あなたが考える甲斐の家2006」のコンペを事例に指導経過を説明をする(※この生徒は道都大学のコンペにも応募しており、それ以降指導の担当となる)。

6. 1. 1 日本工業大学のコンペ指導について まず日本工業大学建築設計競技(課題~家の中の自然現象の中の家~)の指導過程について進めていくこととする。

指導内容について まずコンセプトの進めかたを具体的に説明すると、ア. 設計条件を理解するよう何回も読ませる。→意見交換をする。→一番言いたいことだけをつかむ。→設計条件から予想ができることは何を生徒

に検討させる。(家の中、自然現象の中って?)

イ. そこで何が行われるのかを決めさせる。(ポイントは何かを聞いたり、主催者側は何を求めているのかなど。)→物語を検討させる。(物語があつてはじめて家づくりができるということを助言する。)

ウ. エスキスを検討させる。ここでは必要な部屋だけつくることを助言。(自然現象がない部屋にならないように注意する。)→以降は、この行程を繰り返す。

上記のような要領で指導を進めていくこととした。

Step1 エスキス この生徒は、根気よくて、何回もエスキスを検討し情

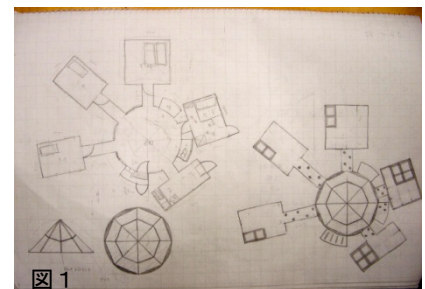


図1

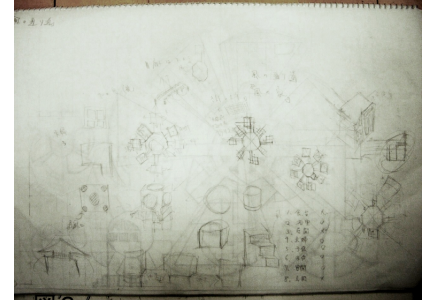
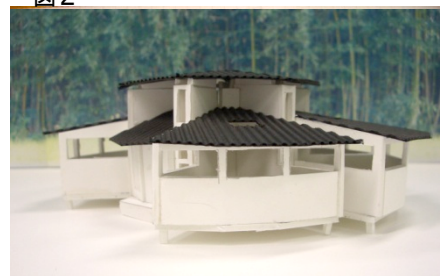


図2



報交換を行った。まず最初にはコンセプトを考えさせ、次に具体的な平面構成を考えさせた。最初のプランでは中央に円形の部屋があり、この部屋から放射上に部屋が分布している（図1）。そのプランからさらに何かアイデアが出ないかと試行錯誤したエスキスから見れる（図2）。さらに検討させプランがスッキリした感じになり、断面図へと入る。ここで風がどのように抜けていくのかを断面と平面のエスキスをみて助言した。また立面では、実際に建てるとしたらどんな素材を使うかなどの助言をした（図3）。

Step 2 模型制作 プランニングだけでは、表現が不足がちになることがある。そこで次の段階として、模型を作ることにより、自分の設計した建築が立体として把握できることを助言し制作へと入る。模型素材の選定では、瓦素材の紙と漆喰の表現をしたいとのことで模型素材の選定についても助言をした。さらに模型の指導では、風の通り道を模型のスケールでの

目線で確認させ、検討させるなどの助言も行った。この検討すると、住み手側の生活空間や風の流れ道が参考になることを助言した。

Step 3 プレゼン いよいよ図面の総まとめとしてプレゼン指導に入る。

今まで決定した設計案（配置・平面・立・断面。模型写真）、建物のモデルとなったイメージ写真やコンセプトなどをA1ケントにどのように表現すれば相手に伝わるかなどを助言した。具体的には、まず横書きの場合であるが、これは中心部にメインとなる平面図を書き、その下に模型でのメインとなるイメージ写真を配し、そのさらに下側に立面を見せ、

両側に断面、その下側に視角を変えた写真を配置する（図5）。次に縦書きのプレゼンの場合では横書きの場合を縦にした形で表現する（図6）。もう一つのプレゼンの仕方として上側と下側にメイン図面（平面と断面及び立面）を固定させ、上側と下側の間に写真、右側上部に設計趣旨、下部に写真を配置するプレゼンを助言した（図7）。

Step 4 ふりかえり 以上のように、Step1 から Step3 までの指導を繰り返し行うことにより図面が完成した。本人と

としては納得のいかない図面になってしまったようである。その理由として、造形から入ってしまったことで本来の設計趣旨が弱くなったこと、時間配分を考えずに進めてしまい、図面のバランスや見比べなど全体的インパクトの弱い図面になってしまったようである（図8）。

指導者からの評価としては、まず粘り強くよくがんばってきたと思います。内容に関しては、どうしても造形を先に考えて進めてしまう様子が見られ、エスキスは平面やスケッチが多く、文章が不足しているのが気になる点である。またプレゼンでは写真の大きさや断面を用いた風の入り方の説明が不足しているのも気になる点である。今後の課題として検討時間の配分やコンセプト（ストーリー性も持たせる）と事例研究、を取り入れるような指導となるように改善を試みた。

生徒としては、さらにコンペに挑戦をしたいとのことで、この反省点を踏まえてさらに、コンペにチャレンジすることとなる。そこで、次のコンペ指導として山梨県林業振興課が主催する、私が考える「甲斐の家」で進めていくこととする。

生徒としては、さらにコンペに挑戦をしたいとのことで、この反省点を踏まえてさらに、コンペにチャレンジすることとなる。そこで、次のコンペ指導として山梨県林業振興課が主催する、私が考える「甲斐の家」で進めていくこととする。

6. 1. 2 山梨県林業振興課が主催する「あなたが考える甲斐の家2006」

図4

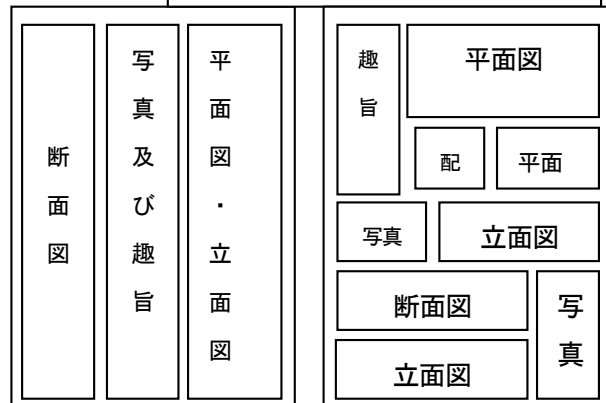
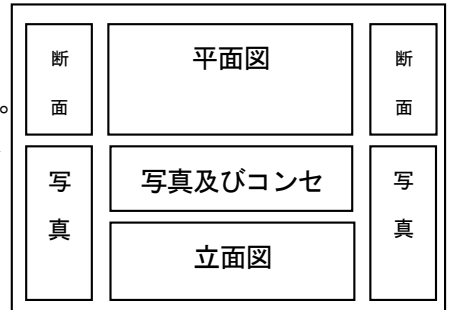


図6

図7

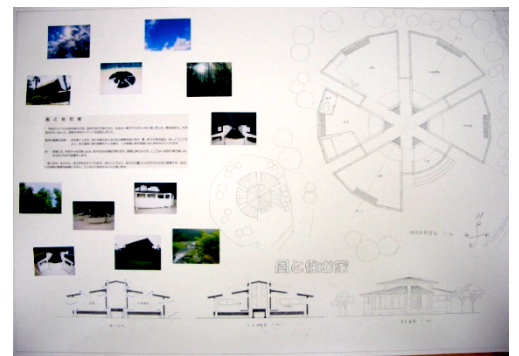


図8 生徒の図面作品

導について

山梨県林業振興課が主催する「あなたが考える甲斐の家2006」のコンペの概要
～私が考える「甲斐の家」～

山梨県には、スギ・ヒノキ・カラマツ・アカマツなどの森林資源が豊富にあります。これらの木（県産材）を住宅の構造材や内装材に使って、

- 自然や環境と調和した住まい。 ■地域や家族の交流を育む住まい。 ■健康的で気持ちのいい住まい。
- 子どもや高齢者に安心・安全な住まい。 ■丈夫で長持ちする住まい。 ■メンテナンスのしやすい住まい。
- ライフスタイルに対応した住まい。 ■山梨の住文化を継承する住まい。

など、山梨の気候風土に合った快適で魅力的な木造住宅の間取りや外観、構法(造り方)のアイデアを提案するコンペである。提出図面はA3ケント3枚以内である。

指導内容について ここでは、前回のコンペ(日工大)の指導の反省点を踏まえ、以下のような指導を行った。

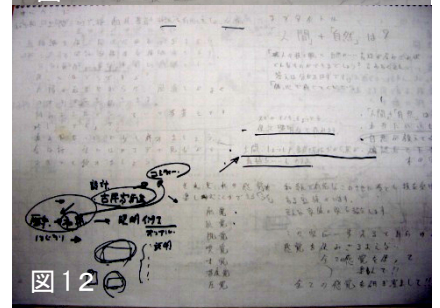
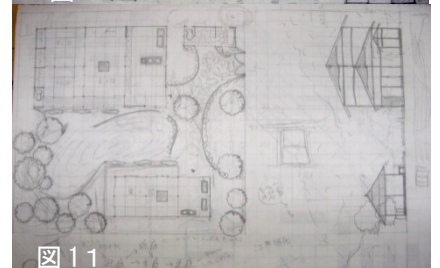
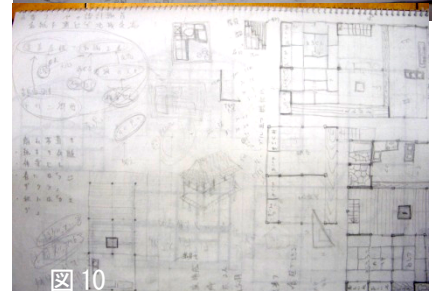
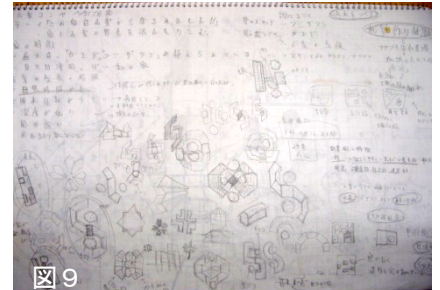
- I. 山梨県の森林資源の調査と山梨の文化、風土、技術などをまず調べ、そこから勉強するよう助言した。
- II. 地域との交流を育むための仕掛けを考えるよう助言した。(例えば特産物や技術あるいは衰退問題など。)
- III. 山梨の住文化となるモデルの町を選定する(同時にコンペ事例も)。

以上主要と思われる事項を研究及び調査をし、これ以降はこの他(主催者側の8つの条件)を取り込んでいくことを助言した。

Step1 エスキス まず、上記の調査をした文章が書いてあるのが図9である。山梨県に関する色々な情報を記述し、そこからプランへと入っているが、やはり造形先行型になりがちで再度コンセプトから進めるよう助言した。図10では、調査した中からさらに絞ってモデルとなる町を選定させた。理由のない選定はやり直しをさせ粘り強く努力を続けた結果、町の選定にたどり着き、「和紙を通じて地域との交流」というコンセプトにたどりつけた。そこからもう一度8つの所要条件に戻り、それぞれの条件を溶け込ませてゆくことを助言した。和紙を通じて地域との交流、町の選定の結果から、民家へとたどり着き平面構成は単純な田の字型になりイメージスケッチからも暖かみのある住まいになりそうな感じがしてきた。また生徒は民家の調査をよくしており、理解も十分であった。その後は配置図や平面、立面がほぼ完成に近い状態まで行った(図11)。

以上のようなエスキスの過程を経て模型へと入るが、ここでは、もう一度検討した8つの所要条件を図面や工夫した点などが主催者側の趣旨に対してズレが生じてないかを生徒とのやり取りでコンセプトの見直しと表現のしかたを助言した(図12)。特に文章の言い方や表現を工夫することを助言した。さらにストーリー性を重視することにより、審査者に対して心地良さや、イメージの深化を助長するような文章となるよう助言した。ここでは具体的な説明をし進めていくこととする。

まず、コンセプトの最初に書くのは、プロローグである。山梨県内の町の設定や、その町の特徴(この町は



和紙職人が少なくなっている問題点を捉えて。)など。そしてどのような家をつくるのか。その登場人物の思いなども検討しながら、建物の趣旨へと入っていくことを助言した。

次に設計した建物の中で生活をイメージした思いを検討させ、季節を通じてどのように風と光が入るか(例:光、風などキーワードとしてくる。)、またその仕掛けや建築と自然との調和などを検討させた。さらに部屋から山梨のフジサクラや紅葉が見えている光景を配置図で確認できイメージをふくらませるような文章をめざすよう助言した。また所要条件の確認も検討させ、地域の人たちと和紙を通じた照明や障子づくりもイメージして表現するよう助言した。

以上のような形で助言し、さらに木の表情などを文章で表現する場合として旅行雑誌の文章を引用し、その文を自分の言葉で書くような助言も行った。

続いて文章の最後となるエピローグである。ここでは、一番言いたいことを検討するよう助言した。

最後に、このコンセプトをよく読ませて、全体のタイトルを何回も検討させた。

Step 2 模型制作 続いての模型制作では季節感を思わせる全体模型、メンテナンスのしやすさ、小屋組みのイメージなど、文章だけでは伝わらない部分を表現するために模型を作るが、本人はもうそのイメージが湧いていたようである。模型完成後は、写真を撮っていく。この写真(図13)はコンセプトに合わせて、撮り直しを含め約50枚ほど撮った。

Step 3 プレゼン エスキスを何回も重ねコンセプトの文章も検討し、文章だけでは伝わらない部分の模型制作など、プレゼンを行う上での材料がそろい、いよいよプレゼンへと入る。ここでは提出した図面をもとに説明することとする。

この甲斐の家のコンペの設計図では、A3サイズ用の紙(縦、横は自由)3枚以内提出であるが、ここで2枚にするか3枚にするかの検討で、過去の作品から本人は3枚で書くということになる。また用紙は横書きでレイアウトし、プレゼンの基本構成は(図5)を参考にするなどできるだけ暖かみがあり、県民に親しみやすく思ってもらえるように着色も暖色を使うように助言した。あとはどのようにレイアウトしたら見やすいかを検討させた。

Step 4 ふりかえり 以上のように、エスキスからコンセプト(国語力)、模型制作、そして、プレゼンまでの繰り返し指導と生徒の努力により図面が完成した(図14)。本人としては、かなり大変だったようである。でも同時に達成感も感じられた。

生徒の反省では、2枚目のプレゼンが思うようにいかずに、ただ並べている感じがして納得のいかない図面になってしまったようである。その理由として、考えすぎてどう進めていけばいいのかわからなくなったようである。でも今回のコンペは時間配分も考え、前の図面に比べて全体的に「完成度の高い図面に仕上がった!」と本人は言っていた。

指導者からの評価は、自分なりの考えを作品に反映できるようになり力が段々ついてきた感じがし、またプレゼンも上手に表現し相手に伝わる図面になったのではないかと思います。特に指導するに当たって苦勞し



図13 模型写真 生徒作

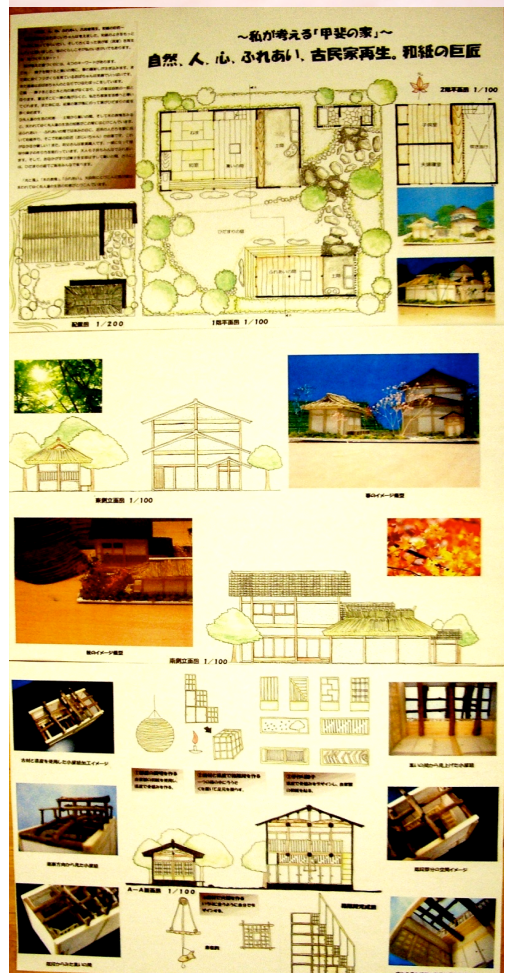


図14 山梨県のコンペ 提出作品

た点は、設計趣旨を何度も書きなおしさせ、厳しく接し設計がいやにならないかなど、このステップを通り越せるのが心配でしたが、粘り強く私の指導に従ってくれました。また、模型の小屋組の表現はできるだけ実際の材質に近いイメージにたく、近くにある木の細い枝を利用するなど工夫している様子が見られた。さらに、山梨県についての調査資料もたくさんあり本人との意見交換ですぐ情報が頭に入っていることがわかった。

本人は、反省点で2枚目のプレゼン内容が不十分と言っていたが、私は全体を通して完成度が高いと評価したので、本人に太鼓判を押し、「これは賞をねらえるぞ!!」と思ったが、残念な通知がきてしまい結果は選外であった。本人は相当落ち込んでいたようであり、また指導者としても悔しい思いをした。特に受賞した者でしか体験ができない建築関係者の評価を何よりも頂きたかったので、非常に残念である。

その後は、元気を取り戻しさらに挑戦するとのことで、名古屋工業大学の設計競技に新たな挑戦で幕を開けることとなる。

6. 1. 3 平成19・20年度のコンペ指導
平成19年度のコンペ指導をして特に残念な結果となった(生徒、指導者共)生徒の作品の紹介を進めていくこととする。(※九州産業大学の作品については模型のみです。)

図15の写真は、九州産業大学のコンペ案の模型です。テーマは「構造をデザインする」というテーマである。この生徒は「昔の建築で進めたい!」とのことで進めていき、結果としては選外に終わり、その後本人は受賞者の作品が編集された冊子が来ますが、その本の受賞作品をよく読み自分とどう違うのか。また審査員の評価及び講評をよく読み今後の課題としていたようである。

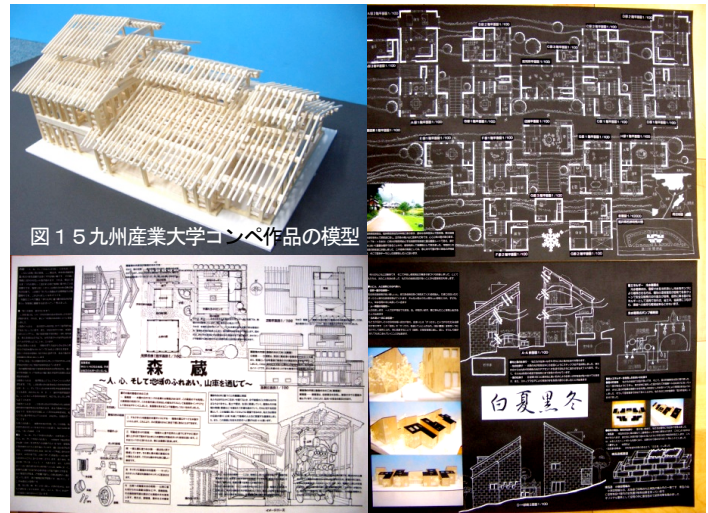


図15九州産業大学コンペ作品の模型

図16埼玉県・木の家設計コンペ案

図17名古屋工業大学 コンペ案

続いて図16の写真は、埼玉県木の家設計コンペの案である。これも同じ生徒の作品で、「無垢の木をとことん生かしたまちなかの住まい」が今回のテーマである。このコンペは学生の部で大学生も含み受賞するには難しいコンペで、このコンペに挑戦させました。指導内容に関しては、本人の地元である埼玉県熊谷市に設定し、地元の住まいを調査するよう助言した。その後、具体的なストーリーやエスキスの助言、また意見交換や情報交換などを行ってプレゼンへと入る。この図面は大変完成の高い図面になった。コンペの結果では、最終審査まで残り、その後大学生3人に3票差で、負けて選外という結果に終わった。本人は非常に落ち込んでしまい、私は安藤忠雄さんの『連戦連敗』の本をわたし、これを読むよう助言した。その本を読み終えたころに、また挑戦する!とのことで、名古屋工業大学のコンペへと進む。

最後の名古屋工業大学では、テーマは「夏涼冬暖～風土エネルギーを有効利用～」である。このテーマは本人にとっては難しかったようで、共同作業(3人)という形で助言した。このうちエスキスは本人の案でいくことになり、福井県若狭町を舞台に雪エネルギーの利用の提案で計画を進めていくこととした。全体のストーリーとしては8家族が協力しあい生活をするという設定で建物は構造や仕上げの工夫をするよう助言した。ここで生徒たちから表現は特徴ある図面仕上げで挑戦したいとのことで、炭のイメージを黒ケント、雪を白のイメージ(全体を白インク仕上げ)で書くことになり、黒ケントの下書きはかなり苦戦していたようである。この図面も完成度の高い図面となった(図17)。ここで、コンペ指導で実績ある山梨県甲府工業高校の櫻井先生に講評をいただきたいと思い、見ていただいた。その時の講評文である。

- 断面図は一面ですが、夏と冬を分けて説明した方がよりわかりやすいような気がします。
- 命名として「夏涼冬暖」に対抗して「白夏黒冬」のタイトルはいいですね。タイトルの意味を知りたい気にさせられます。
- 模型写真以外にも雪のイメージ写真も入れると、見る人のイメージをより膨らませてよかったのではないかと思います。

その後、生徒たちとふりかえりを行い、その話を聞いて「つめがあまかった！」と書いていました。櫻井先生に、このような評価を頂き生徒もいい勉強になったし、私もとても勉強になりました。櫻井先生ありがとうございました！

最後になる平成20年度のコンペ指導では、日本工業大学のコンペについて進めていくこととする。テーマは「天と地を結ぶ家」である。

コンペ指導を行っていて、エスキスだけの意見交換では、あまり立体的な把握や光の入り方の検討が不十分になるため、エスキス模型を作り検討させていく方法で指導することとした(図18)。本人としてはかなり苦戦していたようである。天と地をどのようにつなげればいいのかを検討させ、エスキス模型をみて何度もコンセプトを練りなんとか完成したが、図面下書きが全体的に右に2cmほどずれてしまい、右側全部の図面が入らなくなるアクシデントがあり、全部書き直しになる。その下書きを2日で終了させ、墨入れを1日で書き、ここまで書けるようになっていたのが驚きである。その後は、コンセプトに時間をとられてしまい、ギリギリ提出できた状態であった(図19)。

ふりかえり このコンペは難しく、理解するのに時間がかかったようである。本人の反省点としては、下書きを失敗したのが悔しかったことや、斬新な屋上と地下空間をどのようにつなげればいいのかを苦労したようである。

指導者としては、斬新な屋上と地下空間の説明が不十分で、十分な下調べや事例研究も行いましたが十分に生徒に伝えられなかったのが今後の課題である。

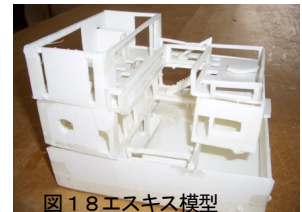


図18 エスキス模型



図19 日本工業大学コンペ案

6.1.4 卒業生の声 卒業生、ト部 義瑛(うらべ よしあき) 君 平成21年3月 中央工学校 卒業。その後 (株)第一建設(埼玉県本庄市)へ入社。

はじめに私は高校3年のときに「コンペ」を経験できて良かったと今でも感じています。そしてこの「コンペ」と出会わせてくれた先生にも多少なりとも感謝しています。

私は高校3年時に計4つのコンペに挑戦しました。先生から直接指導を受けたのは、2つ目の「日本工業大学」のコンペからです。この作品は製作日数は約3週間位だと思います。この同時期に「日本大学」も募集をしていて、自分の中では2つ出そうと無謀なことを考えていました。そのことを先生に言ったら、止められ「日本工業大学」の方に出すことにしました。なかなかコンペのやり方や要領が分からない中で先生は「物語を考えろ！」と何度も言っていました。そのときは「物語」の意味が分かりませんでした。しかし「物語」をつくることは家を設計するうえで一番重要なキーワードです。たとえどんなに奇抜でデザインが良くても、「物語」が存在しないと何の説得力もない作品になってしまいます。コンペには「趣旨」や「テーマ」があります。その与えられたものに合った「物語」を自分なりにアイデアとしてできれば、良い作品になるんだと先生は言いたかったのかもしれませんが。しかしそれを理解できずに建の物の形から考えてしまったので、迫力の欠けた作品になってしまいました。このコンペが終わった頃に段々分かってきました。この失敗を生かし、次のコンペで最高の作品となった「あなたが考える甲斐の家」のコンペに挑戦しました。

まず始めに物語、趣旨のヒントとなるものを見つけるには、山梨について調べました。そこで注意する点は調べていくうちに本来のテーマから脱線しないように、常にテーマを意識することだと言われていました。今

回は時間もあったので何度も先生と意見交換をしました。自分が良いと思って見せても、なかなか先生は認めようとはしなかったです。しかもしつこくて、合うたびに「何かおもいついたか?」とか「趣旨は考えたか?」と聞いてくるんです。さすがにそんな日々が続くといやになりかけたことも何度もありましたが、先生はそんなのお構いなくどんどんせめてきます。だんだん自分の中にもいつか「先生を黙らせられるようなもの」を考えてやる!という気持ちもわいてきました。そういったやり取りをしてうちにこの作品のこの物語が見えてきました。このときにコンペが楽しいと感じました。それからは何度も先生と話し合いを重ねプランの内容を詰めていきました。この時に自分の考えを膨らますために意匠模型を作りました。模型は2つ作り、全体模型と内部の構造がイメージしやすいような模型を作り、先生に見せたときに「これはすごいな!!」と感心していた先生を見たときは、思わず顔がにやけてしまいました。

ついにまとめのプレゼンの作業に入ります。この頃までにいろいろな過去の作品を見ていたので、どのように配置をすれば第三者に伝わりやすいのかなどを考えられるようになっていました。始めの段階でかなり「物語」を意識して考えたいので、内容の濃い作品に仕上がりに、これを見た先生も珍しく「これは賞をねらえるぞ!!」とまで言ってくれました。でもなんとなく2枚目だけが空白の部分が目立っているように思えました。でもなかなか生徒を認めようとしめない先生がここまで言ってくれたので、少し受賞を期待していました。ですが結果は選外でした。自分でもかなりよくまとめられていただけに悔しかったですが、ここまでの作品が作れたことは自分でもびっくりです。

その後、さらに進学を決めた理由もコンペにあります。コンペを行っていた頃は、自分はまだまだ知識が足りないことや分からないことばかりだということを感じました。もっと建築について勉強をしたいと思いました。高校の製図の授業はコピー製図ばかりでなかなか理解できない部分が多く、ただ写していただけで楽しいと思える瞬間はあまりありませんでした。しかしコンペをするときはゼロからの始まりで、自分から動かないと何も始まりません。だから自分から様々なこと調べ、考え、行動する。この感覚はコンペに出会うまで知りませんでした。

最後になりますが、絶対にコンペをやったほうが良いとはなかなか言えません。ですが作品が出来たときの達成感はずいぶんありますが、それと同じくらい大変な労力を使います。提出期限間近は寝ずに作業したり、放課後も遅くまで残ったり心身ともに疲れますが、これをキッカケに自分の考えや価値観、建築に対する想いが良い方向に変われると思います。ありがとうございました。

6.1.5 卒業後の指導者の声 中央工学校 生川 清孝(おいかわ きよたか) 先生 (ピデオレター)

平成19年4月に入学をした私のクラスに、熊谷工業高等学校出身の生徒さんが5名おります。そして、その中の2名が竹田先生のコンペ班に在籍しておりました。このことは入学時は全く知らず、コンペ班のことは、実は卒業後に知ることになります。

5人とも非常に優秀で、在学中の作品も素晴らしい内容です。そしてなにより一生懸命に物事に取り組む姿勢が、他の学生の模範となるような状況でした。

私が感じる、コンペ経験者の本校での特徴はいくつかあります。

ト部君で言えば、中央工学校への入学以前にコンペに取り組んでいたことで、設計に対しての心構えが大きく違うように感じます。物事に対して疑問を持ち、問題定義から提案へという設計プロセスがしっかりと



ト部君の模型

います。特に、ト部君は空間を立体的に考えることがきちんとできていましたので、入学当初の住宅課題から、大変素晴らしい設計であったことを覚えています。これが、ト部君が入学をして初めて設計した住宅のモデルです。よくできていましたので、学校で保管をさせてもらっています。

この住宅には、さまざまな工夫が盛り込まれています。他の学生は課題をこなすことで精一杯で、より深い学習まで至ることができていません。その中で、彼はそのレベルにとどまらず、一步先を見据えた学習ができていたように思います。この大屋根の内部空間を検討するのに、何度もやり取りを繰り返し、そのキャッチボールの中で納得がいく内容に仕上がっていききました。彼は自分の設計に意固地になるようなことがないために、アドバイスを聞いて自分なりにプランを立て直すことで、繰り返しエスキスを進めることができていました。

ただ・・・、ト部君は悩みすぎる傾向がありましたので、エスキスがスムーズにいったのは、この作品くらいかもしれませんね。

例えば、中央工学校の卒業設計では、社会的な問題に対しての新しい建築的な提案を求めています。学生には『提案』と一言と言っても、なかなか理解をしてもらうことができません。しかし、コンペに取り組んだことのある学生は、考えること、提案することに慣れていきますので、楽しみながらアイデアを模索できているように感じます。

中央工学校では、住宅課題や卒業設計の他に、さまざまな形式での設計課題を設定しています。そして、どの設置科においても『提案』することが重要になり、その発想を形にしていくことが一つのテーマになります。これは社会においても同様だと思いますが、物事に対しての考え方や捉え方を、早い段階で学習をすることで、卒業後の学習でも高い効果が期待できると思います。

ト部君に今日会えなかったことは残念ですが、今後の活躍を期待しています。これからも頑張ってください。また、学校に遊びに来てくれるのを待っていますから、その時にゆっくり話をしましょう！

それでは、簡単な内容で失礼いたしますが、私なりにト部君の学習状況報告と、コンペに取り組むことについての所感をお話させていただきました。御清聴ありがとうございました。

7. おわりに 本校のコンペの取り組みを始めて、まだ経験が浅いのですが、3年目で2桁の入選作品数を出すことができた。しかし同時に、指導者として勉強不足の面もあり残念ながら入選に届かなかった作品もあり、生徒たちに悔しい思いをさせている。中でも太鼓判を押しながらの選外もあり悔しさでいっぱいである。

表3. 取り組みと成果

《 建築設計コンペ・年度別入選者数 》

回数	主催者	夏 季 (4月～9月)										冬 季 (10月～3月)					合計	
		道都大学	日本大学	東洋大学	日本工業大学	愛知産業大学	九州産業大学	日本建築協会	秋田県立大学	工学院大学	小計	埼玉・木の家	甲斐の家(山梨県)	東日本建築研究会	名古屋工業大	中央工学校		小計
1	平成18年度	1	選外	不参加	選外	不参加	不参加	1	不参加	不参加	2	1	選外	1	選外	3	5	7
2	平成19年度	1	1	1	選外	不参加	不参加	不参加	不参加	4	1	不参加	不参加	1	3	5	9	
3	平成20年度	1	不参加	不参加	1	1	選外	不参加	1	1	5	選外	不参加	不参加	選外	5	5	10
	合計	3	1	1	1	1	1	1	1	1	11	2	0	1	1	11	15	26

コンペの指導をしていて、コンセプトを重視した作品づくりを重ねていった生徒は、創造的な造形を示すようになり、また完成後の生徒の表情をみると達成感と満足感あふれる表情でいっぱいであった。生徒がもつ「無限の力」を掘り出す手助けをするのは教員の役目ではないかと3年を通じて感じた。

コンペは、大変な労力がかかるが、忘れてはいけないのが保護者のご協力である。このご協力なしには、取り組めないことである。忙しい中保護者の方々は生徒が遅くなると向かいに来て頂いたりしてコンペのご理解も頂き感謝の気持ちでいっぱいである。

今後は指導者としてさらに教材研究を深め、相手に自分の考えを伝える(プレゼンテーション)訓練、建築の総合力、建築の楽しさを生徒に実感させれるよう日々努力していきたい。